



Title	中国思想史研究における国際交流への覚書：『戦国楚簡と中国思想史研究』特集号によせて
Author(s)	佐藤, 将之
Citation	中国研究集刊. 2004, 36, p. 3-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61017
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国思想史研究における国際交流への覚書

——『戦国楚簡と中国思想史研究』特集号によせて——

佐藤将之

はじめに

平成十六年三月二十七日ならびに二十八日の両日にわたって大阪大学文学院で開かれた『戦国楚簡と中国思想史研究』国際シンポジウムは、従来日本で開かれてきた中国思想研究領域における他の類似のシンポジウムとは異なつたコンセプトにより構想され、後述するように従来とは異なる方法により運営、実施された国際シンポジウムである。もちろん、このシンポジウムが学問的に日本や海外の中国思想史と出土新資料研究の発展をめざし、

その中に位置付けられるという点において、他の学術シンポジウムと何ら異なるところはない。しかし筆者にとつてのそれは、個別分野の学問的発展の枠をこえ、日本における中国思想研究の国際化推進と、それをいかに効果的に行うかという試みのなかで企画されたシンポジウムなのである。

果たしてこのシンポジウムの提案者として筆者は、今回主催を引き受けていただいた大阪大学文学院の湯浅邦弘教授、その準備と実施に際し様々な作業にあたられた戦国楚簡研究会の菅本大二助教授とともに当初からの運営を行なつてきた。特に台湾からの参加者が所属する「簡

帛・道家資料ならびに新出土資料文献研読会」（以下「簡帛研読会」と略す）は、年間の経費わずか三十万円で、ホームページはあるが、もともとの主旨が（資料）読書会といったものであるため、運営は研究会の通知状送付程度の雑務を行う院生パートタイマーが一人いるだけという、組織としての実体がほとんどない研究会であった。そのような「簡帛研読会」が、国際シンポジウムの運営・実行を行うことは、ほとんど不可能であった。そこで筆者は、今回のシンポジウムが具体的な準備段階に移行するに当たって、筆者の研究室でパートタイムを務める五人のアシスタントをこのシンポジウムのための「工作小組」として組織し、また同時にこの「工作小組」メンバーの渡航・滞在費用を中心とする予算約五十万円を簡帛研読会とは別に国家科学委員会等から筆者の個人研究に与えられる経費より投入し、戦国楚簡研究会や大阪大学との連絡はもとより、発表者の選定から台湾側参加者のための予算獲得、会議論文集の作成、航空券の手配から通訳等の作業を、筆者の研究室で一元的且つ全面的に請

け負うこととなった。

筆者がなぜ本件と基本的に別の個人研究費とそれに論文が何本か書けるほどの時間と精力まで投入して、このシンポジウムの運営に当たってきたのか。それは、国際交流において、具体的な突破口を見つけられないまま、「お互いを理解しあう」ために「議論を深め」ているレベルで膠着している日本の現在の状況を少しでも打開出来ればと願ったからであり、また、特にこの分野の今後を担う学生諸君にそれが現実に可能であるということを実践の上から示したからである。

もちろん、このシンポジウムが日本の戦国楚簡研究会と大阪大学文学院との共同プロジェクトの結果として実施されたという意味において、また、このシンポジウムの意義はその参加者が参加した後にそれぞれによって評価されるべきであるという意味において、このシンポジウムの原企画段階で私個人が考えていた意義というものは、それが開かれた後にその結果から帰納される意義とは区別されて考えらるべきものであろう。しかしながら、

このシンポジウムが私の描く中国思想史研究の未来についての見取り図をもとに当初企画された点は紛れもない事実であるし、このシンポジウムを企画するにあたって私が描いた見取り図と、その運営のプロセス、さらにこのシンポジウムの特色等についての記録を残すことも、無駄ではないだろう。今後日本の中国思想史研究分野における国際化を推進していく上で、参考となりうる材料をひとつでも提供できれば。

本稿は以下、このシンポジウムに企画するにあたっての筆者の根本的な問題意識、そしてこのシンポジウムの特色に台湾からの運営プロセスへの叙述もまぜ、筆者自身のそれらに対する見解を記すことにする。ただ、以下の内容は、原企画者としての筆者の立場からの本シンポジウムへのかかわりであり、戦国楚簡研究会、大阪大学、および台湾簡帛研読会から、個人参加者ひとりひとりにいたるまで、このシンポジウムに対して、特に学問的な意義はそれぞれあるわけで、以下筆者が述べる意義というのは、日本の中国思想研究の国際化推進における側面

に限定されているという点を繰り返し断っておきたい。

日本の中国思想史研究の未来

——研究規模の劇的縮小と世界からの孤立化——

二十一世紀における日本の学術および高等教育において、中国思想研究という分野は果たして一定の水準と規模を持つ研究分野として生き残っていきけるだろうか？私はこの分野のいわゆる職業研究者になることを意識し始めて来て以来、この問題をずっと考え続けている。高等教育における人文分野の予算・人員の縮小は世界的な趨勢にあるとしても、それにもまして日本人の心においての中国古典が、戦後、漢文教育の縮小化の影響も受けながら、世代が下るにつれ、ヨーロッパの古典音楽やハリウッドの名画ほどに格別の切実さを持たなくなってしまうのは事実あり、今後、中国文明が世界のスーパーパワーとして再君臨する、あるいはそのような見通しが起こらない限り、日本において失われつつある中国古典研

究の地位は今後数世代にわたって回復出来そうにない。

このような状況のなかで、中国思想史研究と言う分野は今後生き残っていきけるのだろうか？

そのような問題意識を持って、現在ヨーロッパのシノロジの状況を見ると、規模は小さいながらも、英語と中国語での出版を意識しながら自らの研究成果を世界での研究状況にコンテクスチュアライズさせることによって、生き残りを図っている状況が参考になる。例えば、全ヨーロッパで荀子の研究をする人がたとえ一人しかいなくなつたとしても、英語や中国語で出版することによって、直接、出来るだけ広い範囲の学術的サークルに自分の研究成果を残すことが可能になる。しかし、日本の中国学研究は、そのような方法で事態に対処できるであろうか？例えば、世界の中国学研究の発表言語が中国語と英語に収斂されて行く中で、ある語学に長けた個人ということではなく、研究者の大部分が中国語や英語で研究発表し、また論文を書くことが出来るようになるのであろうか？おそらくこう言うと、優れた研究という

のは、普遍的な価値を持っており、それはいかなる言語でなされていても問題は無いと主張する人がいるかも知れない。

確かに、日本の中国古典研究の成果は、特に歴史研究を中心に、文革で学術活動そのものが沈滞してしまった中国本土は別にしても、戦後数十年にわたって確実に世界の中国学に重要な貢献を与えてきたと言つてよい。それは、アメリカ主要大学の中国学研究プログラムにおいて日本語が必修科目となつている事実にも現れている。しかし、これらをもつて、日本の中国思想研究が今日、日本以外の研究者に利用されているかといえ、それは別の話である。例えば研究者について言えば、日本以外では、中国古代思想研究の専門家であっても、今や赤塚忠や板野長八の名前を知っている人は少ない。引用となると、欧米では若干あるもの、台湾、中国では全くないといつても良いくらいである。特にここ二十年以来、日本の研究成果を自己の研究に必要不可欠であると考え、国外の研究者は、どんどん減少している。欧米につい

て言えば、日本語文献の重要性の相対的低下は英語でかかれた中国思想史研究文献の飛躍的増大と反比例している。つまり、欧米の若い学生にとって、英語で書かれた研究をフォローするだけでも、かなりの労力を必要とする時代になってきているのであり、日本語の研究は、彼らにとつてはすでに遠い存在のものになっている。この点について私にとつて象徴的だったのは、一九九七年、日本のある研究について私にたづねて来たハーバード大学の当時院生の友人に『日本中国学界報』に載った論文を紹介したところ、ハーバード燕京図書館はもう数年以上前から『日本中国学界報』を購入していないと聞かされたことであつた。予算が潤沢な燕京図書館でこうしたことが発生するというのは、過去数年間だれも『日本中国学界報』の重要性を図書館に訴える人がいなかったということを意味する。

ちなみに、私が七年間滞在したライデン大学の中国学図書館は、ヨーロッパの中国学研究図書館として最大級であるが、吳榮子 (Joyce J. T. Wu) 前主任の方針では、

『日本中国学界報』等の学術誌は購入継続（あるいはライデン大学の『通報』誌との交換関係の維持）の努力はされていたものの、日本語の単行本は、研究スタッフの強い推薦があつてそこではじめて一冊一冊購入されるという状況であつた。つまり日本の書籍は指で数えられるほどにしか購入されていないのである。また、中国においては、北京大学の中国哲学研究室の図書室や、吉林大学の図書館も見学したが、そこでも日本の研究書は全くと言つていいほど購入されていない。もちろん、それは厳密に言えば外国で出版された書籍全般に關して言えることだが。しかし、近年中国では、欧米の中国思想研究の主要な成果がぞくぞく中国語に翻訳されている事實は、この際強調しても良いだろう。古代中国思想研究に關して日本ではまだ訳書がなく、A. C. Graham、B. Schwartz、それに R. Ames の代表的著作は中国語で広く読まれている。

中国語圏の研究者と欧米の研究者との相互交流関係が深まっている反面、日本における重要な学術誌や単行本

が日本以外で購入されなくなり、それにともなつて、日本の研究成果が、ほとんど過去のものとして忘却されつつある、世界の中国学研究の今日の状況を鑑みると、日本における中国思想の研究は、このまま行くと、世界の中国学研究にコンテクスチュアライズされずに、ヨーロッパの各大学においてインド古典学をはじめとする諸古典学が実際にたどっている道——プログラムの統廃合や学科そのもの閉鎖などのプロセス——をつうじて、全く衰退してしまふことすら否定できない。ここで日本の中国古典学の優秀性を主張する人がいれば、その人はヨーロッパのインド古典学やヘブライ学が果たして優れたものではないのかあらためて自問してみるとよい。

中国思想研究分野の国際交流へ基本構想と国際シンポジウムの企画

以上論じたように、中国思想史の研究が、日本の社会にとつて切実性を失い、また世界の中国学研究からの孤

立化が相当進んでいるというのが、日本のここ二十年くらいの状況に対する私の観察であるが、前者の問題については、今は措いておくとして、後者については、我々のここ数年から十数年の努力で（究極的には人材の育成が不可欠にしても）ある程度は改善できるのではないかと私は信じており、その信念にしたがつて私は、三つの方向から日本の中国思想研究の国際化のための努力を続けている。三つの方向とはすなわち、一、日本の研究書籍の組織的購入。二、日本の中国思想研究の包括的紹介。そして三、線の太い国際交流活動の推進である。それらの概要については、本号に収録されたパネルディスカッションの私の発言部分にあるので、そちらを参考されたいが、国際シンポジウムの推進は、私が日本の中国思想研究国際化推進のための活動の第三に当たる「線の太い国際交流活動の推進」の一環として実践されている。

本論に入る前に、ここでまず日本人研究者が海外で参加するシンポジウムの一般形態について述べてみたい。通常、日本、台湾、そして中国で行われる国際シンポジ

ウムという点、当然のことながらその開催地域の発表者が大部分を占め、それに国外からのゲスト発表者が数名、さらにそれもなるべく多様な地域から招くということが一般に行われている。もちろん、多様な観点を紹介する意味において、多様な地域の学者を招くというのは、それとして意味のあることであるが、それら多様なゲストによる発表と討論を有効に生かすためには、討論に必要な共通言語が参加者の間である程度確立されていなければならぬ。この点において、中国思想史分野における日本以外の国際シンポジウムで使用される言語は、それぞれの優劣はあるにしても、欧米では英語、中国や台湾では中国語にほとんど収斂されており、もし、日本からの参加者がそのどちらかをしっかりと駆使出来なければ、せっかく海外のシンポジウムに参加しても、その短い発表時間のみで発表内容のポイントを参加者に正確に伝えるのは難しい。さらに討論への参加も困難だといえ、日本からの参加者が会議全体では浮いてしまいか、大型の会議だと日本からの参加者同士がいきおい固まってしま

い、日本人同士でお互いの理解を深め合うという皮肉なケースにならざるを得ない。こうした状況が国外の学者の日本人学者のイメージにフィードバックされ、またそれと併せて、外国語で発表される日本学者の論考の少なさも影響し、今日の国際学術活動における日本の中国思想研究の存在感の薄さにつながってきたのだと考えられる。台湾において国際シンポジウム準備委員会などにおける討論を聞いていると、日本からの招待は、「一人くらいはいい」という会議の形式的要求から来ているケースが案外多いのではないかと推測されるのである。このような状況下においては、日本の研究者が今までどうりたざらばらでそれぞれ国際シンポジウム参加するようなパターンをずっと続けていても、世界における日本の中国思想研究の孤立化状況はあまり改善されまいと危惧されるのである。

以上の状況を観察しつつ、筆者は平成十四年八月にオランダより台湾大学に赴任して来たのであるが、台湾の簡帛研読会の活動に参加し始めた当初より、陳鼓應教授

などから国際交流への要望が出ていた。そこに平成十五年春、戦国楚簡研究会の菅本大二助教授と知遇になり、同会との交流も始まった。そこで、以上のような状況を少しでも改善するために、菅本氏を通じて、同会に国際シンポジウムの開催を提案した。またその間、筆者は大阪大学で開かれた戦国楚簡研究会の研究会に参加したり、菅本氏とも東京において面会するなど同会との交流を深めた。その間、平成十五年夏の台湾のSARS騒ぎなどにより、活動が若干遅延したり、また他の偶然的要素も重なりながらも、今回のシンポジウムの実施までこぎつけることが出来たわけである。

「日本漢学の中国哲学研究と郭店・上海竹簡新資料」

——国際シンポジウムについて——

ここで、見のがしてはならない事実がひとつある。それは、台湾の簡帛研読会は日本の楚簡研究会と三ヶ月の間に台湾と日本で二度の合同シンポジウムを行ったと言

うことである。言い換えれば、今回の大阪大学のシンポジウムは、その三ヶ月前、すなわち平成十五年十二月二十八日に、浅野教授を含む戦国楚簡研究会の四名の学者を台湾大学に招いて舉行された「日本漢学の中国哲学研究と郭店・上海竹簡新資料」国際シンポジウムとペアとなつて、中国思想研究分野における国際交流の効果を倍増させたという点である。すなわち、今回大阪大学におけるシンポジウムの実施は、台湾大学でのシンポジウムの成果の上に実施されたということに他ならない。

この台湾大学でのシンポジウムは偶然的要素から開催が決められ、そのため当初は雑費程度の予算しかなく（開催直前になつて国家科学委員会人文学研究センターと東呉大学よりあわせて四十万円ほどの予算が拠出されたが）、規模の面でも、台湾ではワークショップに分類されてもよい程度の小型のものであつたが、日本の中国思想研究の国際化推進という意味において、日本学者が丸となつて海外に出撃して実施したこのシンポジウムは、大阪大学のそれに劣らず重要な役割を担つたと私は考え

ている。

また一方で、このシンポジウムの開催によって台湾の簡帛研究会の成員は、日本の楚簡研究会の成員と始めて交流をはじめ、三ヶ月後の大阪訪問への意志がこの交流によって固められたと想像できる。今だから言えることだが、台湾大学でのシンポジウムが成功する以前の状況では、台湾の学者たちは、渡航、宿泊費用をそれぞれが都合しなければならぬという状況もあって、郭梨華教授以外の大部分の学者達は大阪へのシンポジウム参加への最終的意思はそのころまでずっとあいまいなままだった。だから大阪大学のシンポジウムがもしそれだけが単独で企画されていた場合、その実施は非常に困難をきわめるか、或いは学者訪問者三、四名の小規模のものになっていたかもしれない。その意味で、菅本氏がこの交流活動の意義をいち早く認め、またそれに呼応して浅野、福田、および竹田三氏も、台湾でのこの第一弾のシンポジウムのための来台を決断してくれたことは、その後の一連の交流活動の成功につながる決定的要因であったと言える。

台湾で行われた「日本漢学の中国哲学研究と郭店・上海竹簡新資料」シンポジウムはその報告者が全員日本人研究者（戦国楚簡研究会の四名プラス南台科学技術大学川路祥代副教授と筆者）で占められるという台湾では前代未聞の試みであった。したがって、このシンポジウムの計画が具体化していくなかで、台湾の簡帛研究会のメンバーからは、日本人以外の発表者も入れたらどうかとの意見もだされたが、私がこのシンポジウムを、上記の如く、日本漢学の成果を台湾の学会に印象付ける活動と位置づけ、またこのシンポは大阪でのシンポジウムとペアになっているので、台湾側の参加者は大阪で発表することに意義があると主張し、発表者全員を日本人とするというフォーマットは終始崩さなかつたのであった。そしてまさにその点が台湾の関連する分野の研究者たちの興味をそそり、報告者はたった六人（台湾では一日のシンポジウムだと発表者は通常十人以上）で且つ浅野教授以外の報告者は国際的には皆全く無名であるにもかかわらず、台湾で行われるこの分野のシンポジウムとしては、

異例の二百名近くにも及び参加者が押し寄せ、台湾大学哲学科の大会議室が一時満杯になるほどの盛況を見せたのである。

二つの国際シンポジウムの特徴

ここで、台湾大学と大阪大学でのシンポジウムの特色について改めて触れたい。特に台湾大学でのシンポジウムを中心に述べると、その特長は以下の四点ある。第一点は繰り返しになるが、台湾大学で行われたシンポジウムは丸一日の会議がすべて日本人の発表者で占められたという点である。このような発表者の特化を徹底することで、専門参加者ひとりひとりの参加のインセンティブを引き上げるのに成功した。逆に言うと、会議のテーマを広げたり、発表者を広い範囲で集めると、ややもして参加者にとっては、聞きたい報告の数が減って、参加へのインセンティブが低くなるという経験に基づいたアレンジであった。

第二に、各自の発表に当たっても、日本語での発表者には、通訳の時間を含め、一人当たり台湾での通常の発表では三分の配分時間の合計（通常一人十五分）を超える発表時間（五十分）を割り当てた。外からの参加者には、論文集が当日になって配られるので、日本からゲストの発表については、聞くだけでその大意が分かることを目標とし、一人当たり出来るだけ多くの時間をわりあてたのであった。通訳の問題に関しては後述する。これら第一、第二のアレンジによって、この会議に聴衆として参加した人は、個別の発表にせよ、全体にせよ、日本の研究の成果をかなりまとまった形で理解することが出来たと信ずる。

第三に、コメンテーターやパネラーは、台湾の簡帛研究学会から出土資料研究第一線の学者が総動員され、また、そのすぐあと大阪で発表する予定であった学者たちにとっては、日本の学界と交流する予行演習ともなった。その結果、大阪大学でのシンポジウムで台湾側参加者はすでに日本の戦国楚簡研究会のメンバーならびにその台湾

での発表について、コメンテーターやパネラー等の役割を通じて理解しており、堅苦しくならない雰囲気での学術討論が出来る条件はある程度整っていた。また前述したように、訪問への土気も高まり、訪問団の規模は当初の予想をはるかに超える二十人にもなった。その二十人が二日間の大阪大学の会議で発表、質疑応答、それにレセプション等あらゆる機会をつうじ、私の提唱する「線の太い」交流を繰り広げたのである。

この点と関連して、もう一点述べておきたい。今回の大阪大学の活動には、三名の院生発表者、二名の通訳、そして四名の院生アシスタント、それに一名の見学希望者も含む十名の研究者のたまごを、同行させたことである。彼らは、一連の準備作業と今回の参加を通じて、(台湾から見た)国際学術活動について様々に学び、その経験を将来に生かすはずである。また、台湾の院生がこの会議の参加をきっかけに、今回ホスト側の若手の中心である、大阪大学と東北大学の若手研究者や院生との交流を開始し、平成十七年春には台湾大学で若手による中国

思想の合同シンポジウムを実施する運びである。担い手が学生であるだけに、この研究分野の将来にとつての明るい材料と言える。

総じて言えば、特に国外から見た場合、国際シンポジウムにおける日本の研究者の参与において重要なことは、日本から一度に出来るだけ多くの参加者が加わり、各シンポにおいて日本人発表者のプレゼンスを高めるとともに、海外においてより多くの日本人研究者の発表の場を設けるための企画を積極的に行っていくということも必要である。ただその際その成功の鍵となるのは言語の問題である。以下本シンポジウム特長の第四点について述べる。

国際学術交流における翻訳と同時通訳の重要性

海外における中国思想研究のシンポジウムにおいて、日本の学界ですでにある程度の指導的役割を果たしているベテランの学者は別にして、若手・中堅の日本人研究

者の場合、中国語か英語の少なくともどちらかでありと議論が出来ない学者は、基本的に（特に最初は）国外から招待されない。それには、主催者側が、日本からの参加者は日本語の論文しか出せないのではないかという不安もその原因のひとつである。筆者は台湾におけるいくつかの国際シンポジウムの準備委員会に参加して、日本学者が参加した場合の上記の状況に対する不安を何度となく聞いた。

しかし、もし例えば台湾におけるシンポジウムの企画において、日本からの論文が中国語に翻訳されることと、会議において報告内容と討論が適切に翻訳されることや約束されていればその限りではない。しかしながらこれは、言うは易し、行なうは難しで、この点においてしっかりとしたサポート体制がとられていなければ、日本人報告者をずらりならべたシンポジウムを企画しても、効果は非常に限られたものになる。そして、台湾と大阪で行ったふたつの合同シンポジウムにおいても、この方面に私が費やした精力と予算は、台湾側からも日本側からも

案外見過ごされているところがあるので、今後の参考のためにここに記しておく。

まず、十二月の台湾大学でのシンポジウムでは、私の報告を含む二篇は、当初よりの中国語書き下ろし、そしてメインの戦国楚簡研究会のメンバー四名の日本語の論文は、京都大学博士課程修了の王綉雯女史と台湾大学日本語学科を卒業して日本留学を準備中の盧彦男君の兩名がそれぞれ二篇づつの訳稿を作り、その全文を私がチェックした。そして会議当日は、王女史に発表時の同時通訳をお願いし、と同時に全セッションで私は王女史の横に座り、通訳に問題があった際に備えた。そしてフロアにいる日本学者のための通訳には盧君を、さらにその他の必要時のために、日本人留学生の若松大祐君（現在東京大学博士課程）を待機させた。さらに、レセプション等の活動においても、王、盧両氏には、一貫して活動に同行してもらい、日本からの四人の報告者ゲストに対し、私を含めて3人の同時通訳が対処するという状況で交流が進められた。そのための予算については、論文翻

訳と当日の通訳あわせて、日本円で二十万円近い費用を
拠出した。

台湾大学のシンポジウムでは、台湾側の学者参加者に
の日本語レベルは、日本語の論文がすこし読めるという
程度を出ておらず、日本の戦国楚簡研究会からの参加者
も、中国語での実質的なコミュニケーションは難しい状
況で、通訳の充実とその適正な配置については、非常に
神経を使ったのであった。

一方大阪大学でのシンポジウムでは、発表そのものの
通訳については、王女史を除く台湾大学シンポジウムで
の「通訳小組」と、大阪大学の院生である上野洋子・千
永梅両女史が筆者のサポートを受けるという形で進めら
れた。ただ、台湾大学の場合と違って、日本からの参加
者は中国語の論文が読める専門家が中心であること、ま
た戦国楚簡研究会が招待した参加者と、大阪大、東北大
の院生の中に、上野女史のように同時通訳まで出来る中
国語レベルの保持者が合計で六、七名はおり、そうした
人々が、会議中のフロアーからレセプションにいたるま

で台湾側参加者の中に入っていく、極めて効率的に双方
の意思の疎通に貢献した。むしろ、片言の英語くらいし
かしゃべれず、アシスタントはおろか「通訳小組」が多
忙な中、コミュニケーションの面であえて足手まとい
になってしまった台湾大学の院生たちが、シンポジウム
の後にその忸怩たる思いをもらしていた。

総じて今回の交流活動に際して、言葉の面においては、
日本、台湾の学者会員同士が直接実質的なコミュニケーション
が取れない状況のなかで、二つのシンポジウムの
進行に伴い日本・台湾双方からの連絡をすべて私が一元
的に処理しなければならなかった上に、同時進行で発表
論文の訳文のチェック等の作業が重くのしかかり、これ
等は研究室のアシスタントも全く無力であって、今から
考えると私自身もよくこの過密作業を乗り切れたものだ
と個人的に関心してしまう。とくに言葉の面で困難が多
かった台湾大学でのシンポジウムに成功したことによつ
て、論文翻訳と同時通訳に適正な予算をつけ、適切な人
材を当てれば、日本学者の海外進出にとって語学面での

ハンディキャップは、交流を防げる決定的な障害とはならないのだという点が経験を通じて分かったことは、これからにつながる大きな収穫であった。

今後への展望——結びにかえて——

平成十五年十二月二十八日の台湾大学でのシンポジウム、そして同十六年三月二十七日、二十八日兩日の大阪大学でのシンポジウムは、筆者が本稿の前半部で述べたような問題意識より企画され、それが日本の戦国楚簡研究会と台湾の簡帛研誼会の各成員がそれぞれ目標とする意義と相互に太い糸を織り成しながら、実施までたどり着いた。今回のこの活動が、日本における中国思想研究の活動に何がしらの刺激があつたかどうかは、国外にいる私には即断しかねるところであるが、少なくとも台湾では、以下のような新たな活動の展開に直接つながったことは記しておく価値があるだろう。

(一) 台湾大学の東亜文明研究センターの出土文献研

究班が日本の戦国楚簡研究会を交流対象として重視、そこで、平成十六年四月十日のシンポジウムに、浅野、竹田、福田の三氏が招かれ、それぞれ報告を行った。三氏の報告は東亜文明研究センターから出版予定。

(二) 特に浅野教授は、中央研究院中国文学・哲学研究所(平成十五年十二月二十九日)と国立政治大学哲学科(平成十六年四月九日)でそれぞれ講演した他、台湾の『清華大学人文學報』より、十二月のシンポジウムで発表した原稿の依頼を受けた。東呉大学からも平成十六年十二月、より広い聴衆向けの連続講義へ講師の一人として招聘を受けた。さらに、郭梨華教授の紹介で出土文献の出版事業で著名な万卷樓書店より、中国語版の論文集が出版されることになった。

(三) 台湾大学哲学系の院生グループが、大阪大学と東北大学の院生・若手研究者六名を招いて中国古代思想に関する国際シンポジウムを平成十七年三月に行うことが予定されている。

また、今回、台湾大学と大阪大学の合同シンポジウム

から発展した交流活動と呼応する形で、筆者自身によっても日本の思想史研究成果が国際的に紹介されるプロジェクトがいくつか進行しており、それらの概要については、本号のパネルディスカッション記録の筆者の発言の中で触れられているのでこちらにも参考にされたい。

思い起こせば、筆者は、ライデン大学で講師をしていた平成十二年ころに日本中国出土学会に以上のようなコンセプトで学術交流を行おうとして、その主旨を書いた提案書を同会に送ったが、まったく梨のつぶてに終わった記憶がある。学会そのものが、(特に若い)個人を相手にしないということは日本ではよくありがちなことであるが、この一連の働きかけに関連して、筆者にとつて残念だったのは、それらのプロセスをつうじて終始若手の研究者から如何なる反応もなかったことである。そのころ、一人でも呼応者がいれば、少なくともその当時ヨーロッパで類似のシンポジウムを年に一度づつくらいは出来たはずである。それ以来四年経ったが、それでも今回、筆者にこういう報告を執筆する機会が与えられてい

る事実自体が、いよいよこの分野においても、国際化への具体的なうねりが起こりつつあることを示しているのだろうか。日本の中国思想研究の発展と衰退の岐路に立つ現在、わが台湾の院生もそうであるが、日本の若い院生諸君にもこれからの中国思想研究をどうすべきかという気概とこうした交流活動はこれから自分が主役になるのだという自覚と積極性を強く持っていたいただきたいと思う。この状況に、もしこのまま若い研究者が保守化してしまつたら、この研究分野は刷新の努力を重ねる別の研究分野から淘汰されて衰退するしかない。また、言葉の問題に関して私は日本の中堅、若手研究者、それに学生諸君に以下のように提案したい。二十代、三十代前半の学生諸君、あるいはまだ海外滞在の機会がある若い研究者諸氏は、近い将来に備えて少なくとも中国語か英語を学術活動が推進できるまでレベルまで高めるべし。すでに勤務先等の事情で海外滞在等が難しい中堅研究者の方は、各研究室において、中国や台湾からの留学生などの助力を得て、研究成果を定期的に中国語で発表出来るよ

うな態勢を整えて欲しい。筆者自身も微力ながらそうした一人一人の試みを出来るだけ支援したいと思う。と言うより筆者による戦国楚簡研究会諸氏の論文翻訳のお手伝いもすでに菅本氏との出会い以来、合計十篇を越える。

最後に、前回台湾での活動も含め、この合同シンポジウムの運営を成功裏に導いてくれた浅野教授をはじめ戦国楚簡研究会と簡帛研読会の諸氏、特に筆者の企画の価値を日本側の学者として最初に見出してくれた菅本大二助教授、それに会議の準備や本特集号の編集に力を惜しまれなかった大阪大学の湯浅教授とスタッフ諸氏、そして、今回のシンポジウムを支持、あるいは盛り上げてくれた参加者の皆さんに心よりお礼を申し上げる。

平成十六年八月二十四日 摺筆